※許可を得て掲載しています

目的地にまっすぐでなくても、当初予定の場所でなくても。さまざまな課題に出合い、時に寄り道もしながら、自らの道を探す多様な人々の姿を紹介します。

知ることから始めよう 虐待・孤立のもとにいる子どもたちの現状

身近なところで起こっていても、外からは見えにくい子どもの虐待、孤立。子どもが「助けて」と言えない、言っても必要な手立てに届きにくいのはなぜだろうか？　虐待や家庭環境により親に頼れない子どもたちの支援をする認定NPO法人「3keys（スリーキーズ）」。まずは現状を知ることから始め、「支援する人たちへの支援を」と呼びかける。

撮影／丸橋ユキ　文／本紙・元木知子

社会の矛盾に気づいて

「コロナ禍で、給付金や協力金などの受給手続きが煩雑だと感じた人は多いと思います」。認定NPO法人「3keys」の代表理事、森山誉恵（たかえ）さんはそう話す。

「日本の社会保障制度は今回の給付金や協力金よりもはるかに申請しづらく、制度の周知もこれほどまでにはされていません」

社会的に弱い立場の人は日常的にこのハードルを突き付けられ、余裕がなく制度の利用に至らないと、「使わない方が悪い」と言われてしまう。

弱者とは、今現在余裕のない人だ。意欲を持って自ら情報を取り、理解し、判断しなければならないような公的救済では、到底たどり着けない。大人でさえ、ある程度の知識や理解しようとする意欲がないと使いこなせない社会保障制度。子どもや若者には遠い存在だ。

森山さんが虐待や貧困によって頼れる大人が少ない子どもたちと関わり始めたのは大学生のとき。近所の児童養護施設が学習支援のボランティアを募集しているのを知ったのがきっかけだった。そこで出会った子どもたちは中高生でも小学生の勉強ですでにつまずいていた。一方、家庭教師や塾講師のアルバイトで出会う子どもたちは、小学生のときから語学を習ったり留学したりしている。あまりの格差にショック受け、虐待などで保護された子どもたちに勉強を教える学生主体の任意団体「3keys」を立ち上げた。

「子どもたちからは、与えてもらうものの方が圧倒的に多かった」と森山さん。大学1年生からビジネスコンテストに参画し、IT関連の企業でインターンとして働いた森山さんは、それまですべて自分の努力の成果と思っていたが、そうした環境は家族をはじめ周囲の人たちに与えてもらったものが大きいと気づいた。

「周囲に頼れる大人が少ない子どもたちが学ぶ環境を得られるように、全力で関わろう」。森山さんは3keysをNPO法人とし、児童養護施設や母子家庭支援施設で生活する子どもたちの学習を支援する事業を本業に選んだ。

当初、小中高生をすべてサポートし、中高生にはマンツーマンの学習ボランティアを付け、家庭教師のように勉強を教えていた。その後、教育格差と貧困の問題が社会的な課題と認識されるようになり中学生以上の子どもには塾に通える給付金を行政が支給する仕組みができたため、学習ボランティア派遣の事業は終了。現在は、当初から最も重要と考えていた小学生を主な対象として、施設内での学習環境を整える事業に移行している。どこでつまずいているのかを見つけて子ども一人一人に合った教材とカリキュラムを提供する事業だ。虐待を受けた子どもは、自分の意見を言えないことが多いと森山さんは言う。「親にすら素直に頼ったことがない子どもたちが、学校で分からないと質問するのはとてもハードルが高いのです」

▲認定NPO法人「3keys」代表理事、森山誉恵さん

▲10代向け駆け込みWebサイト「Mex」。悩んでいる子どもが支援団体を検索し、その場で相談、予約できる。現在、オンラインで相談会を配信中

見えにくい10代の本音

2014年、3keysは子どもの「なやみ相談窓口」を開設。施設入所児童に限らず、虐待、孤立のもとにいる子どもたちに支援を拡大した。さらに16年、10代向けの支援サービス検索・相談サイト「Mex（ミークス）」を立ち上げた。学

まるばし・ゆき　東京都生まれ。フリーカメラマン。ライター。郊外、自然、暮らし、子どもなどをテーマに活動。

習支援に携わる中で、今の子どもたちにとって、本音で気持ちや悩みを打ち明けられる環境があまりにも少ないと感じてきたからだ。レストランや賃貸住宅を検索するサイトのように、Mexにアクセスすれば、多様な選択肢の中から自分の悩みに最も合う支援機関や相談先を見つけることができる。

当初は3keysが子どもたちの話を聞いた上で、適切な支援先につなぐ形を取っていたが、子どもが一度勇気を出して話したのに、次の支援先でまた話すのは負担が大きく、初めから自分で相談しやすい支援機関を見つけるサイトに変更した。19年度は1万人以上がMexを介してどこかの支援機関とつながった。これは児童相談所に相談する子どもの数の10倍に上る。匿名性が担保されたインターネット上での相談のニーズの高さを裏付けている。

インターネットを介して人とつながることに抵抗を感じる大人は多いかもしれない。しかし、頼るべき大人がいない子どもたちにとっては、大人を介さないと支援にたどり着けないことの方がむしろ怖いと森山さんは指摘する。支援団体や専門機関の対応は「かたい」「使いづらい」といったイメージが根強いが、そのせいで一人で悩みを抱える人、とりわけ10代の子どもが増えてしまうのはもったいない。専門的な機関に早期に安心してつながることができるよう、インターネット上の環境を整えるのも大人の役割だろう。

学習習慣が定着した施設では、コロナ禍で休校になっても子どもたちは自分に合った学習に取り組むことができた（写真提供　認定NPO法人3keys）

虐待を受けた子どもたちの家庭状況　出典：東京都福祉保健局（2005）　データ制作：認定NPO法人3keys

ひとり親家庭：460件（31.8%）	① 経済的困難	② 孤立	③ 就労の不安
経済的困難：446件（30.8%）	① ひとり親家庭	② 孤立	③ 就労の不安
孤立：341件（23.6%）	① 経済的困難	② ひとり親家庭	③ 就労の不安
夫婦間不仲：295件（20.4%）	① 経済的困難	② 孤立	③ 育児疲れ
育児疲れ：261件（18.0%）	① 経済的困難	② ひとり親家庭	③ 孤立

（注）虐待につながると思われる家庭の状況を上位5つについて、他の状況も合わせて見受けられる事項を、上位3つ示しました。

知ること、知らせること

コロナ禍で3keysもさまざまな対応を迫られた。定期的に施設を訪問し学習環境を整えてきたが、それができなくなり、支援を始めたばかりで学習習慣が定着していない施設では、試みが振り出しに戻ってしまった。インターネットを利用した学習が今後さらに格差を広げることも懸念される。パソコンやWi-Fi環境だけでなく、基礎学力がなければインターネットでの自学自習は難しい。3keysが支援するのは、どう勉強していくか自分に委ねられても対応できない子どもたちがほとんどなのだ。

Mexに掲載している支援機関については活動内容を把握し直し、休止している場合は代わりにどの機関を掲載するか、選考に追われた。公共広告では外出自粛を繰り返し呼びかけていたが、「ステイホーム」が苦しみでしかない子どもたちがいる。アルバイト先からの雇い止め、望まない妊娠など、悩みはさまざまある中、虐待からの逃げ場所がない子どもたちにどう対処していくか、森山さんをはじめスタッフは力を注いでいる。

虐待から未成年を保護するのは児童相談所であって、民間団体は適切につないでいくことしかできない。しかし、施設や警察に良いイメージを持っていない子どもは、そこに頼るくらいなら家にとどまる方を選ぶ場合もあるという。一方、厚生労働省の18年度の報告によれば、虐待通報のうち児童福祉施設や里親のもとで暮らせるのは全体の4%で、96%の子どもは家に戻されてしまう。命に関わるような過酷な状況にあっても、発見され、保護されるのはほんの一握りだ。

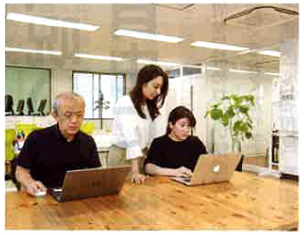
「子どもの虐待について正しく知ってほしい」。森山さんはそう訴える。一般的なイメージと現場で起きていることのギャップの大きさを日々感じると言う。近年、子どもの貧困対策については一定の成果が出てきたとはいえ、「昔は貧しいのが当たり前だった」というような話が出ることがある。貧困問題以上に虐待問題の国の予算は少ないが、「親が悪いのに予算を付けたら虐待が増える」といった誤った言説も聞く。社会の理解が進まなければ、政治も制度も変わらない。自分が育った環境や過去の経験を前提にせず、子どもの訴えをまずは受け止めることが必要だ。

5年も10年も家族から傷つけられてきたら、簡単に人を信じられないのは当然だ。暴言を吐いたり、たたいたり、子どもは同じ年数をかけて試し行動を続ける。「施設でのボランティアは中途半端な気持ちではできません」と森山さんは言う。確かに困っている子どもに直接寄り添うのは勇気が要る。とはいえ、「放ってはおけない」「何とかしたい」と思う人が増えなければ、問題はいつまでも解決しない。社会や制度を変えるのは、困っていそうな子どもに気づき、力になろうとする小さな行動からだ。

子どもの虐待、孤立に向き合う人の話を聞き、その活動を支援することが、今求められている。

児童相談所の虐待対応件数の推移

出典：厚生労働省（2017）　データ制作：認定NPO法人3keys



◀虐待だけでなく、いじめや性被害などMexに寄せられる悩みは多様だ。常勤スタッフの他、さまざまな専門家の協力が欠かせない